

氏名・(本籍地) 十時 淳一 (神奈川県)  
 学位の種類 博士(仏教学)  
 学位記の番号 甲第68号  
 学位授与の日付 平成22年3月15日  
 学位論文題目 中国初唐期における教判論の研究—玄奘訳『天請問経』を中心として—  
 論文審査委員 主査 平井 宥慶  
 副査 廣澤 隆之  
 副査 川勝 賢亮

## 十時 淳一氏 学位請求論文審査報告書

### 「中国初唐期における教判論の研究—玄奘訳『天請問経』を中心として—」

#### 論文の内容の要旨

本論文は、序論・本論・結論から成る。章立ては、次の如くである。

序論	
第一章	初唐三時教の教判の位置付に関する研究の経過と問題点
第二章	七世紀後半—十三世紀初頭の東アジア諸地域における『天請問経』の受容
本論	
第一章	中国初唐期の唯識三性説に基づく教判論と機根論的観点の関係
第一節	敦煌本『天請問経疏』(BD14116)に見える『法華経』解釈
第二節	『文軌疏』の教判に三時教の解釈
第二章	中国初唐期の声聞戒を中核とする三聚戒に見える種姓差別の観点とその意味
第一節	七世紀後半の中原仏教に於ける三聚戒理解の一側面—S2551に見える文軌撰述『天請問経疏』の引用に関連して—
第二節	道宣の三聚戒理解における種姓差別の観点とその意味
結論	
参考文献一覧	
資料編	

序論では、この分野の、これまでの先行研究について概観し、その到達したところと、足らざるところについて論説し、本論者から見て、その到達点なるものに、いささか異議ある旨が述べられている。内容については、次の審査結果に述べるが、ひと言で言えば、玄奘仏教の齎した唯識学の評価について、教相判釈の面から、これまでの通説的评价に対して再考を促している。

本論では、まずその初唐期までの中国仏教界の大筋の傾向について、中国仏教の流れが大乗仏教に大きく

傾いた結果、本学論的傾向を強めていったと総括する。そういうところに、同じ大乗仏教でありながら、著しくインド的な色彩を背負った、そして中国仏教の流れきたった方向とは少しく趣きを異にした唯識仏教の登場で、中国仏教界が甚だしく影響を受けて、その象徴として、五姓各別思想の許容適度を問題にし、中唐以降の仏教展開を、本論者なりに、えがきなおしてみている。

本論者の主要な研究資料は、玄奘訳の『天請問経』と、これに注釈をつけた文軌の『天請問経疏』(以下『疏』)で、この『疏』は、何故か敦煌写本の中にしか残っていない。本研究は、その敦煌資料の研究、とも言い換えられる。敦煌莫高窟から発現した写本の資料的性格については、これまでも随分議論されてきた。その写本の中味によっては、その敦煌という地の仏教があったか、無かったか、という議論の前面に押し出されるものもあるが、これについては置くとして、この本研究は、中原仏教の動向の一端を明らかにする、類いのものであることを明瞭にしておきたい。

そういうことで、本論者は、中国仏教の思想的展開の中でも特に重要な、教相判釈の問題点を取り出して議論する。その際、論者の根本資料と、在来伝承の中原仏教における、玄奘の弟子らの著作とか、戒律家の道宣などの著作にも眼を向けて、検討を加えている。この場合は、この敦煌写本は、完全に中原仏教に関する資料であるということを認識しなければならない。この点、論者は十分に理解しているように見受けられた。これは研究の姿勢に関わることで、(課程)博士論文を書くものとしては、極めて重要な認識であるこ

とを意識しなければならない。

本論第二章以降で、この『天請問経疏』の投げ掛けた問題点は、決して唐期に留まることなく、以後の中国仏教界に、その一部ではあるが、永続的に伝承されていた、と論じている。つまり、その教相判釈の有効性は、決して初唐期に留まるものではなかった、と、論者は主張する。少なくとも論者の管見に寄れば、十三世紀までという。

結論は、これらの主張のとりまとめをしている。

資料編に、敦煌莫高窟における経変、經典の一部を絵画にして書きあらわすなか、この『天請問経』を題材にした窟の有様を図示している。この経変は、ひとつの窟にひとつの經典、というわけではない。二つ以上複数の經典の登場することもしばしばあって、この『天請問経』も、他の經典の経変と合併で描かれることも少なくない。その相対の經典は、概して『薬師経』と合する場合が多い、という。ここに何かの関係性を見て取れるかも知れないが、必ずしもそのアイデアははっきりしない。

参考文献は、かなり多量に示されている。このほかに各章の項目に示されているものを考慮に入れると、課程博士論文としての体裁は整えられていると判断できる。しかし、次の内容審査の項で触れるが、いささか「資料」の部分に不足を感じる。資料編は、この経変に関するもののみで、ほかに付録されるものは無い。こういう博論には欠かせないものと思われる、例えば、本論文の主要經典の本文、並びに本論で極めて重要な役割を演ずる『経疏』の本体は他の学術雑誌にすでに発表されていることをもって、本論文には無い。この論文に添付されてこそ、価値あるものとなる。今後の体裁調整には充分注意して進むべきと心得る。

なお、ここには明示しなかったが、各章のなかにはまた、いくつかの節がある。これをもって、中味につき、ある程度の見当がつくようになっていくことは評価すべきと心得る。その各節乃至章単位で、いささか編集整理未調整の部分が目立つ。これは、今後充分に検討していかなければならない、本論文の課題である。

以上、内容の要旨を簡略に述べたが、本論文の論ずべき課題は、極めて単純明快なものである。

この具体的内容は「審査の要旨」のところで述べるが、それについて、その簡明な趣旨に比して、本論文の分量としては、いささか紙幅を使いすぎるといった感想を禁じえない。しかしこれは見解の相違ということであ、ここは論争の場ではないので、本論者の今後の研鑽を期待し、これが、どの程度独創性を有し、か

つ課題追及方法に学的手続きをきちんと踏まえているかをみることをもって、審査の基準とするものである。

この叙述「内容の要旨」は以上である。その具体的論点については、次に述べるごとくである。

## 審査結果の要旨

### 【本文】

本論文を、課程博士論文として、合格とする。

### 【理由】

本論文の出発となる問題設定、その設定課題に至る先行研究の検討方法、第一次資料の蒐集方法、設定課題の疑問解明に至るべき追完手順、参考文献の網羅性、検討段階に関する注記の仕方、論稿の構成、結論の独自性、等々について、確実に学問的手続きを、怠りなく実行している。そして又、本論課題に関する各部的発表は、全国区学界において既に為されており、その当否はともかくとして、批判にも遭遇しているという学問的評価を受けていることから、当論者が当該学術界の一翼に存することは、充分に確認することが出来る。

本論文に関するこれらの諸案件に適合していることを熟慮して、この論文が、大学院後期課程（博士）単位取得後六年以内までという条件付の「課程博士論文」としては、一応の「合格」に値することを認めるものである。

しかし出来上がった本「論文」単体としては、問題が無い、ということではない。この点を、以下論ずるものを「審査結果の要旨」としたい。

### 【審査の要旨】

インドガンジス川中流域に勃興した仏教は、数世紀をかけてインド亜大陸全域に広がり、さらに、漢文化世界に引入せられることになる、インド世界のそれとは又一味も二味も違った展開を見せて、長き時間をかけて、その漢文化世界に溶け込んでいった。したがって、「仏教」といっても、さまざまな変容を来たしたことは、必然であったといえよう。

その特徴的なひとつに、「教相判釈」というのがある。教えの相（すがた）を判別し解釈する、ということである。「教え」は仏教、というから、ホトケの教えに違いないが、事実上、それはインドで生成発展して、經典の成立というかたちで、次から次へと加上的に形成されていった。インドでは、これは時間軸に沿って成立をおうことになっていたから人びとはその時間軸に沿ってあゆめばよかったが、それが中国に至るについては、その成立の時間軸にそって順次に追うということではなく、その成立前後をまったく考慮しないで

伝来してきたから、中国世界の仏教者らは、これらの経典を釈迦一代の教相としてどう整理するか、が一大課題となったのである。そして「教相判釈」をすることになる。

そして以下、論者は主張する。

中国に展開した仏教は、所謂「小乗・大乘」仏教を並行しつつ導入した結果、大勢は大乘仏教を選択することとなった。仏教は全ての人々の成仏を願う宗教という認識で、それは大乘仏教に体现されている、と中国の仏教者らは考え、仏教思想の潮流は「悉皆成仏」観の方向に流れていくこととなり、それは南北朝後期から隋朝期に顕著になる。

そして唐朝の開幕とともに、玄奘の仏教が齎された。その仏教は、唯識の「三時教判」と「五姓格別」思想を特徴とし、それは前述した「悉皆成仏」観とは著しく齟齬するようにみえる思想でもあった。ことに「五姓格別」思想は、事実上成仏できない人々を認める思想であったからだ。「悉皆成仏」志向に傾いていた中国仏教界は、正直かなり違和感を抱いたことであろう。少々閑説すれば、これはインド仏教思想の正直な反映でもあったろう。インドの仏教界はインド民衆の現実を踏まえて構築された思想にのっていた、ということである。中国仏教思想は中国仏教者の“理想”指向理念によって形成された、ということでもある。

中国仏教界は、この思想を学ぶことによって最新インド仏教を学ぶことになったから、玄奘の影響の強い時期は、唐仏教界は玄奘仏教一色のようにみえた。しかしその没後は、しばらくは弟子たちの唯識教学構築作業によって維持されたが、その持続現象も孫弟子段階頃になると急速に衰え、三代のちの弟子代は、もはやその影は見えなくなるほどであった。そしてその後、玄奘の齎した「三時教判」「五姓格別」思想は印度仏教の特殊性を強調した一時的現象にすぎない、というほどにみられ、中国仏教の主流は、いよいよ禅仏教的色彩を強めていった、と定義付けられる様相となっている、と論者は主張する。

さて本論文は、そういう通説に対し、この「三時教判」「五姓格別」思想は、そういう一時期に終わったものではなく、若干の修正的解釈が加えられて、後十三世紀頃の中国仏教界にまで伝承されていた、ということ、を、主張するものである。それを論者は、玄奘訳『天請問経』の伝承と、その「文軌」による注釈疏の解釈によって証明しようとしている。

玄奘訳『天請問経』は、当初大乘経典として判釈されていた。それが、中唐期より、小乗経という判定に

組み入れられることとなる。この流れに対して、文軌は、やはりこの経典は大乘と位置付ける。この論者の主張によれば、『天請問経』を「発心する不定種姓の声聞(退菩提声聞)及び応化声聞の戒の延長上に(菩薩)三聚戒を位置付ける」から、と云う。要するに、確実に成仏できない種姓とおもわれるものでも、それは大乘の体を得る目を有するとみること、で、印度の「五姓格別」思想を、中国的な悉皆成仏思想に近づけるような解釈を加えているように論者は理解する、つまり、あえて言えば改変している、と論者は主張するのである。

その論ずる経過で、円測、曇曠などの名も出だし、インド唯識的各別思想が、円測によって融和的思想に変革していき、敦煌で活躍したと思われる曇曠に至る、そういう流れと、文軌の思索が呼応するとき論調も見える。この点については、審査者は見解を異にする。けれども、審査的には、論者の論述は学的手続きを踏まえていることを認める。

そしてこの『天請問経』の依用は、十三世紀ごろの逸文にまで認められると論者は主張して、かの、玄奘の齎した教相判釈思想は、決して一時的な理解に留まらず、中国佛教界の一部には後世まで伝承されていた、と論者は主張して止まない。つまり、当初問題の所在として提議された、玄奘の齎した唯識仏教の教相判釈の有用性は、通説が謂うような一時的なものではなく、一定の連続性を有して伝承されていた、と主張するのである。

この主張は本論者独自であり、当該学界にとって独創的な主張と認められる。この独創性ということは、課程博士論文として必須の要諦と心得るが、本論文はその要件を十分に満たしていると認定する。

但しこのみかたに議論が無い、とはいえない。しかし、その論議は、ひとつの論争的議論であり、異にする見解の存在、すなわち「論争的やり取り」は学問には避けられない過程のひとつであるから、本論文の存在も、学的進展には、好ましい現象で、評価としてはプラス方向にさえなるものである。ともあれ、今の時点としては、論者がこの点を十二分に自覚することを希望し、論者のこの後の研鑽を期待するばかりである。

加えて、論文の構成としては、この論文の主たる資料であるべき『天請問経疏』そのものが添付されていないのは、まことに不備というほか無い。これは既述の如く、すでに他の学術叢書に、論者自身の翻刻として発表されている如くであるが、この本論文に付いてこそ、意味ある資料となる。同時に、『天請問経』そのものの再治化があればよりいいと心得る。これはす

で『大正新修大藏経』に存する、といっても、本論文では、もっとも主要な資料のひとつである。本論を展開すべきとき、その根本資料の提示は、論者として、やはり必要な努力と考える。考慮を求むものである。

また、以上にまとめてみた論旨を証明しようとする本論文の文章は、正直かなりの晦渋を極める文章で、ほとんどその読者としては、当該分野専門研究者しか予想していないように見えるものとなっている。これには今後、その専門を少しく異にするものにも了解できるような、充分なる推敲があるとより一層良好な論文となる、と思量する。

以上、その学的方法において、本論に使用した資料・参考文献・引用書等の明示がきちんとなされ、第三者をして反証可能の体裁を有しており、又本論者自身の手によって、すでに何度かの学界の発表もある（すでに学的活動に従事している）ことを評価に加えて、「課程博士論文」として「合格」とするものである。

以上「審査内容の要旨」とする。